

# 満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害

**Japanese Women who emigrated Manchuria:  
Women's Roles and Sexual Abuse**

松 田 澄 子  
Sumiko Matsuda

山形県立米沢女子短期大学

『生活文化研究所報告』

第45号 抜刷

2018年3月

# 満洲へ渡った女性たちの役割と性暴力被害

## Japanese Women who emigrated Manchuria: Women's Roles and Sexual Abuse

松 田 澄 子  
Sumiko Matsuda

**要旨：**「大陸の花嫁」の役割は、満洲支配を強固かつ永続させるため、日本民族の子どもを産み育てることであった。そのため、日本国内から大量の花嫁を送り込んだのであった。また、寮母の役割は、満蒙開拓青少年義勇軍の隊員たちの母性的養護及び指導であったが、屯墾病を防ぐ有効な手立てとはならなかった。

北朝鮮や満洲方面からの引揚げ女性の中絶手術は、非合法のもと極秘に行われたが、他民族の血を国内に入れなかったためであり、民族防衛思想がはたらいていたことを明らかにした。

岐阜県の旧黒川開拓団における「性の接待」については、開拓団内の男性支配の下で、女性が「出征兵士の妻」と「未婚女性」とに分断されて、未婚女性が犠牲になったこと、引き揚げ後も元開拓団幹部による暴言や偏見に被害女性は長年苦しめられてきたが、そこに支配と服従の関係と女性差別の構造があることを明らかにした。

**キーワード：**満蒙開拓青少年義勇軍 大陸の花嫁 寮母 墮胎(中絶)手術 性の接待

### はじめに

戦前、多くの人々が国策に従って、旧満洲国(中国東北部)に農業開拓民として渡って行った。日中戦争が本格的になると、徴兵される男性も多くなり、移民政策に支障を来すようになった。これを補うために、20歳未満の青少年を大量に送り込むようになった。これが満蒙開拓青少年義勇軍(満蒙開拓青少年義勇隊とも言う)である。国内と満洲での厳しい教育と訓練を経て、開拓団に移行していく制度であった。これらの人々の定着をはかるために、日本国内から多くの女性たちが送り込まれ、開拓民たちの妻(「大陸の花嫁」となった。また、満蒙開拓青少年義勇軍の訓練所の女性指導者(寮母)も大陸に渡って行った。

これらの女性たちも、敗戦の混乱の中で集団自決に追い込まれたり、極寒の中で病気や飢えで死亡したり、生きるために中国人の妻となり中国に留まらざるを得なかった女性もいる。幾多の困難を乗り越え無事に日本に引き揚げて来た女性たちの中には、ソ連兵や中国人による強姦で妊娠してしまった女性も多くいた。これらの女性たちは、日本に引き揚げて来た直後に極秘に墮胎(中絶)手術を受けていたことが近年明らかになっている。

また、猪俣祐介や平井美帆は、岐阜県の旧黒川村の開拓団では、中国人による襲撃をソ連兵に守ってもらうために、また食料を分けてもらうために、その代償として「性の接待」が行われており、若い未婚の女性たちがソ連兵に差し出されていた事実を明らかにしている。

この「性の接待」は、これまでに明らかにされて来たソ連兵によるレイプとは異質な面もっている。それは、開拓団の幹部の判断で、生きるためとは言え団員の中から未婚女性が差し出されたという点である。戦後、偏見や差別を恐れた被害者や元団員は口をつぐんで生きて来たが、被害を受けた女性たちが高齢となって、後世のために言い残しておきたいと考えるようになり、性暴力被害の実態を語り始めたのである。

今まで、各開拓団の歴史や敗戦の混乱による悲惨な逃避行の実態を明らかにした本が数多く出版されているが、その多くが女性の視点からの記述は少なく、ましてなぜ旧満洲に多くの女性たちが渡って行かなければならなかったのかという点や、なぜ多くの女性たちが性暴力に遭わなければならなかったのかという点についてはほとんど書かれていない。

本稿では、以下の4点について、女性史あるいはジェンダーの視点から考えてみたい。

- ① 満洲へなぜ大量の花嫁が送られたのか、またその女性たちにはどんな役割が期待されていたのか。
- ② 寮母はなぜ満洲に送られたのか、また寮母に課された役割は何だったのか。
- ③ 女性の性暴力被害とその後の中絶手術は、なぜ行われたのか。
- ④ 岐阜県の旧黒川開拓団におけるソ連兵への「性の接待」は、なぜ行われたのか。

### 先行研究の検討

① 「大陸の花嫁」の養成・送出についての研究は、相庭和彦他著『満洲「大陸花嫁」はどうつくられたか』<sup>1)</sup>に詳しい。この研究では、日本国内での「大陸の花嫁学校」と呼ばれた女子拓務訓練所で女性たちがどのように教育・訓練され送り出されたのか、送り出す側はどのように働きかけをしたのかなどを明らかにしている。送り出した後、満洲では女塾でも花嫁になるための教育・訓練が行われて、花嫁養成が行われていたことも明らかにしている。

この「花嫁」政策は、傀儡国家である満洲国を長期間にわたって植民地支配するために、開拓民を内側から支える女性の養成が主な目的で、「国策花嫁」であったことを明らかにしている。それでは、満洲に送られた女性たち＝「大陸の花嫁」には、どんな役割が課されていたのか。日本内地に於ける女性役割と違いがあるのかないのか、違いがあるのならば何が違うのか、この点も明らかにしていきたい。

この研究者たちの立ち位置は、サブタイトルに「－戦時期教育史の空白にせまる－」とあるように、戦時期における大陸の花嫁養成を社会教育史の一端ととらえての研究である。

筆者は、女性史またはジェンダーの視点から「大陸の花嫁」が置かれていた地位や背負っていた役割について明らかにしていきたい。

② 二日市での墮胎手術については、千田夏光の「二日市・墮胎医病院」（『皇后の股肱－民草として決算書』1977年）、上坪隆の「水子のうた」（『水子の譜－ドキュメント引揚孤児と女たち』1993年）などのルポやドキュメントが、近年では下川正晴の『忘却の引揚げ史 泉靖一と二日市保養所』が2017年に刊行されている。

千田夏光の「二日市・墮胎医病院」では、ソ連兵などによる強姦で妊娠した女性を“ つきではあるが、「不法妊娠」という言葉を使用している。おそらく厚生省の引き揚げ関係の資料に使われているものをそのまま使っているように思われる。この言葉についても検討しなければならない。

また、千田は、二日市での中絶手術を「不倫を許さないとした思想と、産めよ増やせよの富国強兵策のクロスするところから出たものだったのだろう」<sup>2)</sup>と述べているが、不倫が許されないのは女性であって、男性目線からの女性の不倫のことであって、ここにジェンダーが存在することを指摘しなくてはならない。

当時は中絶手術をした医師は刑事罰の対象となるが、閣議で問題になり、厚生大臣は黙認を主張したが、法務大臣は違法行為は厳重に取り締まるべきだと主張したようだ。しかし、その後の記録も記憶している人もいなくて、はっきりしない。二日市で中絶を担当した医師たちは、墮胎罪の対象となり、医師免許も剥奪されることも覚悟していたようなので、医師

の証言などからも、厚生省は二日市保養所での中絶を知っていたのかどうかも検討してみたい。

上坪隆は、『水子の譜ードキュメント引揚孤児と女たちー』の中で、「この引揚援護院がだした『性病水ぎわ防止方針』で、女性だけがその検査の対象にされたこと」<sup>3)</sup>は、「片手落ち」で、性病予防なら「帝国陸軍将兵」の検査が重要だと述べている。なぜ、男性の性病はお構いなしだったのか、この点についても検討したい。

下川正晴は、『忘却の引揚げ史泉靖一と二日市保養所』の中で、中絶手術をしたのは、二日市保養所だけではないことを述べている。すなわち、関東地区の元海軍病院（現在は国立病院機構）に勤めていた看護婦の証言から、引揚者中絶手術が行われていたことを明らかにし、その病院では、戦前体制からの移行期に京城帝国大学出身者が院長になっているという。ほかの国立病院でも中絶手術をしていた内部資料があることも明らかにしている。

また、九州大学の場合には、厚生省から密命が下り、引揚者の中絶手術と性病の治療が行われていたことを明らかにし、引揚者は、福岡と中原（佐賀）の両療養所に送られ、九州大学産婦人科が手術を行ったとしている。

北朝鮮や満洲方面からは、博多港や佐世保港のほか、仙崎港、舞鶴港などにも多くの人々が引き揚げて来ているので、厚生省は九州大学だけに中絶の密命を出したとは考えにくいので、この点も考えてみたい。

③ 旧黒川村開拓団の「性の接待」についての研究者は、猪俣祐介意外には見つからなかったもので、一番まとまっている「ホモソーシャルな戦争の記憶を越えてー『満洲移民女性』に対する戦時性暴力を事例としてー」<sup>4)</sup>を中心に検討してみたい。

敗戦とともに中国人が開拓団を襲撃して来るようになって、旧黒川開拓団はソ連兵に団の安全を守ってもらうことと食料を分けてもらうこととの引き替えに、出征兵士の妻を除く未婚女性を「性の接待」に差し出した。この「性の接待」は団幹部が考え出し、幹部の命令で行われた。このことについて、猪股は、招集された男性仲間への配慮であり、「出征兵士の妻をソ連兵による強姦から守ることで、男性による女性支配および出征兵士と男性団員のホモソーシャルな絆が維持される」<sup>5)</sup>としている。さらには、「開拓団の軍隊的性格や性役割により、出征兵士の妻の身代わりを強いられた」<sup>6)</sup>のが未婚女性だったとしている。そして、敗戦後の「開拓団の運命は団幹部に預けられ、その命令に従わざるを得なかった」<sup>7)</sup>のである。このことについて猪股は、「満洲移民女性に対する性暴力においては、ナショナリズムよりもジェンダーが上位にある」<sup>8)</sup>としている。

なぜ、女性たちが団幹部の命令に従わなくてはならなかったのか、それが当時の満洲の家庭や社会における女性たちの地位や役割と関係があるのか、「大陸の花嫁」と関連しながら、明らかにしていきたいと思っている。また、なぜナショナリズムよりもジェンダーの方が上位にあるのかについても考えていきたい。

さらに猪股は、『白川広報』（1982年）に載っている文章の中に、「ソ連兵憲兵」のおかげで治安が維持できたと書かれていることについて、それはソ連軍による開拓団の治安維持と女性の「取引」およびソ連軍そのものを正当化する効果があること、あるいはその「取引」そのものが、「尊い」ものであると高めてしまう効果があるとしている。

「『慰安所』を『開拓団の痛ましい、屈辱的な事件』と位置づけること」<sup>9)</sup>は、「開拓団の女性を守れなかった屈辱と被害女性の受けた屈辱が、開拓団の共同性に回収されてしまう」<sup>10)</sup>危険性を指摘している。そして、満洲開拓団における家父長制こそが、「幹部男性が強制的に独身女性団員を『強姦の対象』にする暴力の源泉」<sup>11)</sup>であると結論づけている。

この猪股論文を受けて、「性の接待」そのものを女性史またはジェンダーの視点から読み解



くこと、また「性の接待」が女性たちのその後の人生にどのように影響したのか、被害女性たちが戦後をどのように生き抜いてきたのかを明らかにしていきたい。

## 第1章 「大陸の花嫁」の送出と役割

### 第1節 大量の花嫁送出

開拓民は、当初は自分の故郷や知り合いに頼んで花嫁を探していた。しかし、開拓民の多くは、日本に帰郷する金銭的余裕も時間的余裕もなかった。個人的に解決しては、効率が悪いことや、義勇軍が義勇軍開拓団に移行するに従い、花嫁の需要は格段に増していったこともあり、計画的・大量に花嫁を送出することが考えられた。

政府は、1939(昭和14)年に「花嫁100万人送出計画」を決定すると、様々な団体の協力のもとに、大量の花嫁が満洲に渡っていくことになった。この協力団体の中には、日本連合女子青年団や日本婦人団体連盟など、官製の女性団体も花嫁送出に深く関わっている。

大量の花嫁が必要になるわけだが、日本政府は、中国農民の娘を花嫁にとは、まったく考えていなかった。上笙一郎は、「満洲国を本当に〈五族協和〉の国たらしめるには、民族の境を越えた結婚、民族の越えがたい境を結婚によってつなぐことこそ絶好のモメントであるはずなのに、為政者はそのようにしようとは考えなかった。」<sup>12)</sup>と述べている。なぜ、日本人花嫁でなければならなかったのか。

「五族協和」をうたっていても、それは、日本民族が一番優秀だから、日本の支配下において日本民族が各民族を指導し、各民族が協力するものという考えだったので、その優秀な日本民族に他の民族の血を入れてはならないという純血主義が背景にあった。

国内では、「産めよ、増やせよ」のかけ声のもとで、女性たちは5人以上の子どもを産むことが求められていた。同じように、満洲全土を多くの日本民族で満たし、満洲の支配を完全なものにするため、日本人の子どもを産んでもらう妻が必要であった。日本人花嫁を必要とした背景に、こうした民族差別、民族優性思想、あるいは純血主義思想を認めることができる。したがって、日本人花嫁以外は雑婚となるので、これを絶対に認めなかったのであり、そのことが、国内からの大量の花嫁の送出につながったのである。これを女性史の視点からみたならば、日本女性の「産む性」が、大陸侵略の道具に利用されたとも言えるのである。

### 第2節 花嫁の役割

義勇軍は国内での訓練ののち満洲での3年の訓練を終えて、開拓団に移行するが、彼らが満洲に定着するために大量の花嫁が必要とされた。その彼女らに求められた役割とは何だったのか。拓務省拓北局輔導課が刊行した『女子拓殖要指導者提要』<sup>13)</sup>には、以下のように書かれている。これをもとに「大陸の花嫁」に求められた役割について考えてみたい。

1. 開拓政策遂行の一翼として
  - (イ) 民族資源確保のため先づ開拓民の定着性を増強すること
  - (ロ) 民族資源の量的確保とともに大和民族の純血を保持すること
  - (ハ) 日本婦道を大陸に移植し満洲新文化を創建すること
  - (ニ) 民族協和の達成上女子の協力を必要とする部面の多いこと
2. 農村共同体における女性として
  - (一) 衣食住問題を解決し開拓地家庭文化を創造すること
3. 開拓農家における主婦として
  - (一) 開拓農民のよき助耕者であること

- (二) 開拓家庭の良き慰安者であること
- (三) 二世の良き保育者であること

これを見ると、「2. 農村共同体における女性として」の「衣食住問題の解決」、「家庭文化の創造」や「3. 開拓農家における主婦として」の「助耕者」、「慰安者」、「保育者」という項目は、日本国内でも当時の農村女性に求められた役割で、良妻賢母に加え骨身を惜しまず良く働くことが教育の中で重視されてきたのである。それが満洲においても、基本的な女性の役割とされたのである。

満洲で日本国内とは違う役割が課されたのが、「1. 開拓政策遂行の一翼として」の項目であり、「開拓民の定着性の増強」、「民族資源の量的確保と大和民族の純血保持」、「日本婦道の移植と満洲新文化の創建」、「民族協和のための女子の協力」であった。

従って、満洲国で求められた女性役割とは、開拓民で家長である男性を支える従来からの良妻賢母であり、働き者であることのほかに、満洲国を純粋な日本人で満たし繁栄させるための人口政策として、女性に民族資源の量的確保という特別な役割が課されていたといえる。しかも、「大和民族の純血」を保持するためには、他民族の血を入れてはならなかった。

これらの女性役割について、高橋健男は国家の人口政策にそって、日本民族の子どもをたくさん産み育てること＝「国家母性」<sup>14)</sup>が求められたのだとしている。

従って、「大和民族」の純血を守るためであり、「移民推進者は、開拓民と現地住民の『雑婚』が進むことを恐れた。」<sup>15)</sup>のである。そのため、現地で花嫁を調達するのではなく、日本国内から大量の花嫁を送り出すことになったのである。

## 第2章 満蒙開拓青少年義勇軍の寮母

### 第1節 寮母制度の導入とその役割

満蒙開拓青少年義勇軍の送出以降、満洲の訓練所に寮母（正式名は満蒙開拓義勇軍女子指導者）制度が取り入れられ、敗戦まで続いた。この寮母を「大陸の母」とも呼んでいた。

以下、この寮母制度がどのような理由で創設されたのか、どんな役割を期待されていたのかについてみていく。寮母について、『満洲開拓年鑑』（昭和十六年版）によると、寮母（女子指導員）の役割は、10代の若い義勇隊員と起居をともにして、話し相手（相談相手）となり、衣服を繕い、看病をするなどで、故郷にあれば、母親や祖母、姉などが担っていた役割を期待されたのであった。いわば母性的養護・指導が寮母の役割であった。

そうした母性的・女性的養護の必要性に気づいた拓務省や満洲拓殖公社は、最初は教学奉仕隊（教員・学生）や女子奉仕隊（女学校、女子青年学校、大日本婦人会）を送り込んで、農作業や衣類の繕いなどをさせたが、滞在日数も少なくあまり効果がなかったため、取り入れたのが、寮母制度であった。

寮母の応募資格は、当初は「年齢二十五歳以上四十五歳までの寡婦または独身者」で「高等小学校卒ないし専門学校卒」であったが、後に「年齢三十歳以上」で「女子中等学校卒以上」と変更された。その理由は、若い隊員は母親や姉のような存在として受け止めてくれるが、年長の隊員になると寮母を恋愛の対象と見るようなこともあって、もめ事を回避するため、隊員の指導をするには、もう少し年長者が好ましいということと、隊員の多くが小学校卒だったので、それ以上の学歴が必要と考えられたからである。

義勇隊の寮母になるためには、国内の聖和学院で3ヶ月の家事・育児など良妻賢母主義教育を受け、さらに友部の国民高等学校女子部で4ヶ月の訓練を受けた後、満洲に渡ったのである。

## 第2節 屯墾病と寮母制度

当時、屯墾病という一種のノイローゼ（ホームシック）が問題になっていた。屯墾病は、自閉型と攻撃型とがあった。自閉型も隊員の士気に影響を与えるが、それよりも重大視されたのは、攻撃型の方であった。訓練所内での幹部襲撃、隊員同士の抗争、暴力沙汰などが起こり、放置できない問題であった。<sup>16)</sup>

どちらの型の屯墾病にしても、これが義勇隊員の中に蔓延してしまえば、青少年義勇軍制度そのものの崩壊にも結びつくので、対策が急務であった。この問題の解決策として、導入されたのが寮母制度であったのである。

故郷を遠く離れた義勇隊員は、数え年で15～19歳までの多感な少年たちであり、男ばかりの厳しい訓練所で、彼らの求めているものは、「人間的な愛情であり、なかなづく女性的・母性的なやさしさ」<sup>17)</sup>だと考えられていたのである。

寮母が最初に満洲に渡ったのは、1939（昭和14）年で、48名であった。翌年は38名、敗戦の時までに、合計176名が渡満した。これらの女性が、各訓練所に配置されたわけだが、寮母1人当たりの担当者数が、200～400名ほどの大規模な訓練所もあり、これでは、寮母は激務で、きめ細かな指導や相談などが十分できたとは到底思えない。ましてや屯墾病を癒やすには、ほど遠いものであったと言わざるを得ない。

屯墾病の根本原因が、母性的養護の不足にあるわけではなく、発達途上の未成年者を肉親や仲間たちから引き離し、遠い未知の土地に送り込んで、厳しい訓練を施して開拓と万一に備えてソ連との国境警備に当てようとする日本政府の非人間的な植民地政策によるものであったから、寮母制度を取り入れたからといって、屯墾病がなくなるわけではなかった。

## 第3章 中絶手術をめぐる

### 第1節 「不法妊娠」と「正常妊娠」

日ソ不可侵条約を破棄して、満洲にソ連兵が侵攻してくると、女性たちが強姦の被害に遭うようになった。開拓団の女性たちは、髪を切り顔に炭や泥をぬり、床下や屋根裏に隠れたりしたが、毎晩のようにソ連兵がやってきては、女性たちを襲った。また、逃避行中、その場所を通してもらうにも、女性を要求され被害に遭った女性もいる。

満洲や北朝鮮からの引揚者の中には、妊娠している女性や性病を移された女性たちがたくさんいた。引揚げが1946年の春以降になると、一目で妊娠したことがわかる女性たちが船から降りてくるようになり、その年の4月に博多検疫所に婦人相談所を設け、妊娠中の女性、性病にかかっている女性の相談にのり、それらの女性をそのまま二日市保養所（同年3月開所）に送り、そこで中絶と性病の治療がなされた。また、博多港引揚げで妊娠している女性、性病罹患の女性の一部は、国立福岡療養所に送られた。佐世保港に引き上げた女性は、国立佐賀療養所に送られた。

「局史」・「地方引揚援護局史」<sup>18)</sup>をみると、「不法妊娠」と「正常妊娠」の統計が載っているが、「不法妊娠」とは、「夫以外の男の子どもを妊娠した者」のことで、とくに北朝鮮や満洲からの引揚途中にソ連兵や朝鮮人、中国人などに強姦され妊娠した者をさす。それに対し、「正常妊娠」とは、「夫の子どもを妊娠した者」のことである。

戦争が終わったとはいえ、まだ旧態依然として戦前の法律のままであり、家父長制の下で妻の不倫や未婚女性の婚前交渉が許されなかった時代の女性の妊娠のとらえ方である。従って、女性の望まない性関係（強姦）の結果であったとしても、夫以外の者と関係をもち妊娠した者を「不法妊娠」と呼んだことには、差別意識が存在し、ジェンダーがよく現れている。当時は、たとえ、夫の子どもであっても特別の理由がない限り、中絶は墮胎罪で女性も医師も





博多港引揚モニュメント  
2017.3.23 撮影



博多港引揚記念碑 2017.3.23 撮影

刑事罰の対象となった。

女性の「不法妊娠」を心配した京城帝国大学の医療関係者が、引揚げの船内でもパンフレットを配ったりして、女性に相談するよう働きかけていた。引揚げ男性の中には性病にかかっている者もいたはずであるが、こちらは、船内でも働きかけはなかったようで、性病に関しては女性のみを対象にしていたのであろうか。男性を問題にしないのならば、「国内に性病を持ち込ませないため」という厚生省の理由も意味がなくなる。戦前は、夫が妾を囲っていても、あるいは遊郭に通っても法的には問題にされなかったように、男は性病にかかっている、そのまま帰郷させたのであろうか。男性の性病は、博多港で自分から申告しない限り、問題視されなかったのか。そうだとすれば、ここにもジェンダーが存在する。そうすると、女性を収容したのは、女性の性病が一番の問題ではなく、異民族の血を引く子どもを日本国内に入れないための妊娠中絶が目的であったと考えざるを得ない。それは、「大陸の花嫁」に課された役割の延長上にあり、戦争が終わってからもその役割を引き受けなければならなかったのである。

## 第2節 京城大学グループと九州大学グループの中絶手術

京城大学医学部や清津日赤病院、さらには光州医専の医療従事者たちが福岡で合流し、在外同胞援護会救療部を組織し、厚生省の博多引揚援護局と協力して、引揚者の医療救護活動を行っていた（これを京城大グループと呼ぶ）。このグループの医師や看護婦たちは、自分たちも引揚者であり、引き揚げの際に博多港が見えて来ると、大きなおなかをしては帰郷できないと観念した女性が海に身投げするような光景に出くわすようになった。このようなソ連兵などに強姦されて妊娠してしまった女性を救うために、医師たちは非合法であることも承知の上で中絶に踏み切った。女性たちは、おもに北朝鮮、満洲からの引揚者で、博多港からトラックで二日市保養所に運ばれて来て、体力の回復を待って中絶手術は行われた。医薬品も十分ではなく麻酔もなしで手術したが、女性たちは痛みにじっと耐えたという。一番多かったのは、妊娠5、6ヶ月、中には8ヶ月にもなる女性もいて、こちらは中絶というよりは出産に近かったという。この頃になると泣き声をあげる赤ちゃんもいたというが、この赤ちゃんたちは生きることを許されなかった。青い目の赤ちゃん、赤い髪の毛の赤ちゃんもいて、一目で強姦の相手国（民族）がかわるような事例も多かったという。



京城大学グループの医師たちの場合、引揚医療にも関わり、墮胎罪に問われることを覚悟の上で中絶手術を行っていたとされている。

しかし、強姦により妊娠した女性に向けての呼びかけは、「本人には判るが周囲の人には知られぬよう」<sup>19)</sup>、引揚船内でも「不幸なる御婦人方へ至急御注意!!」と書かれたビラを配って行われたが、西日本新聞にも1946年7月17日付けで「外地引揚の御婦人方に告ぐ」という広告文を載せて、女性たちに周知していた。

この新聞広告を見たのか、一旦帰郷した後、二日市保養所を訪ねて来た女性もいたというから、広告の効果もあったのであろう。

この新聞によると、広告主が厚生省博多引揚援護局保養所および在外同胞援護会救療部になっている。このことより、厚生省が知らないはずはなく、黙認していたと思われる。京城大も敗戦で崩壊しており、指揮命令系統もなくなっているため、厚生省も黙認せざるをえなかったのではなかろうか。また、九州大学に下された厚生省の密命の内容は、性病の蔓延防止と強姦によって妊娠した女性の中絶であり、二日市保養所で行っていた医療行為と同じ内容だったので、黙認せざるを得なかったのではないか。

1946(昭和21)年4月16日に高松宮が二日市保養所を訪ね、医師や看護婦たちを激励した。このことによって、医師たちは墮胎罪に問われることはないかと安心したという。この事実からは、天皇と厚生省は二日市での中絶を知らないはずはないのである。

同じ博多港引揚者でも、国立福岡療養所に送られて性病の治療と中絶を受けた人たちもいる。こちらは、九州大学グループが関わっており、厚生省からの、「性病の蔓延と混血児出産を水際で食い止めようとする国の超法規的密命」<sup>20)</sup>によって中絶と性病治療をしたのである。しかし、関係者の口が固くて、詳細はわからないようだ。同じように、佐世保港への引き揚げ女性は、国立佐賀療養所に送られて性病治療と中絶をした。こちらも担当したのは、九州大学グループの医師たちである。

博多港や佐世保港に設けられた「婦人相談所」の相談員や医師、看護婦たちは、一人ひとり「産むか、産まないか」の確認をしたのであろうか。「不法妊娠」は非合法、「正常妊娠」も特別な理由がなければ中絶できなかったが、例外なく中絶手術を行ったのであろうか。

確かに、中絶に関しては、強姦にあった人々の救済措置という意味もあったが、中絶が非合法であった当時、厚生省が自ら法を犯してまで極秘に中絶命令を出していることを重視しなくてはならない。そこには、異民族の血を国内に入れてはならないとする純血主義思想、あるいは日本民族防衛思想が支配していたと思われる。それは、「大陸の花嫁」を大量に必要とした理由と同じなのである。

また、下川が述べているように、関東地区でも中絶が行われていたことや新潟大学は中絶を断ったこと<sup>21)</sup>から、さらには、厚生省の言う「異民族の血を国内に入れない」ためには、各地の引揚港の近辺の国立大学や国立療養所に密命があってもおかしくはない。

性病患者の発見・治療を女性だけに限ったのはなぜか。上坪隆のいうように、性病に関しては「陸軍の将兵」はじめ男性こそ、水際での発見が必要なはずで「片手落ち」である。性病に罹ることは不名誉なことだったので、男性は申告せずに帰郷してしまうことも可能であった。女性のみを対象にしたところにジェンダーがある。

### 第3節 水子供養のお地蔵さんと「仁」の碑

2017年3月に実際に二日市の保養所跡を訪ねて、水子供養の子どもを抱いたお地蔵さんにお参りする機会を得た。生まれて来られなかった子どものこと、中絶した母親の思いを想像しながら跡地に立った。中絶をして新たな人生に踏み出した人もいようが、たとえば自分が

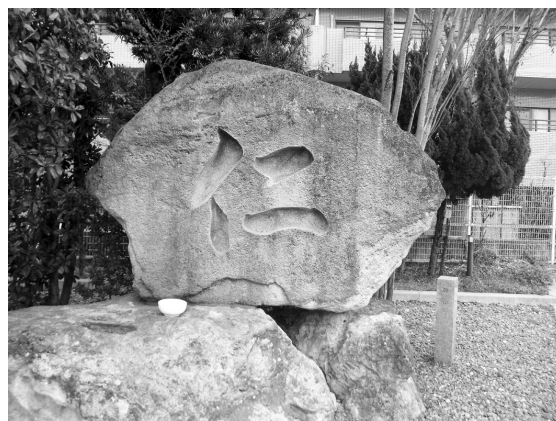
望まない妊娠であっても、産んであげられなかったことに苦悩する女性もいただろう。

このお地蔵さんの隣に大きな「仁」の文字が入った大きな碑が建っている。これは、福岡市内の元高校教諭が保養所での医師達の献身を後世に伝えるためにと、1981（昭和56）年3月に建立したものである。碑の裏側には、建立趣旨が以下のように書かれている。

昭和二十一、二年の頃博多港には毎日のように満州からの引揚船が入っていた。その中に不幸にしてソ連兵に侵されて妊娠している婦女子の多い事を知った旧京城帝国大学医学部の医師達は、これら女性を此処一旧陸軍関係病院二日市保養所一に連れてきて善処した。この事実を千田夏光氏のルポ『二日市・墮胎病院』（晩聲社）で知った私は、墮胎が当時は法律で禁止されていることを知りつつ職を賭して行った彼等の人道行為は後世に伝えるべきであると思ひこの碑を建てた。そして今は夫々の家郷で平穏な日々を送っておられるであろう彼女たちが三十数年を経た今日、この地を訪れて往事の先生や看護婦さんに感謝の意を伝えたい時、この碑がそのよすがとなればと念じている。



水子供養のお地蔵さん 2017.3.23 撮影



「仁」の碑 2017.3.23 撮影

この碑文に違和感を持ったのは筆者だけではなかった。山本めゆは、「『二日市保養所』との出会いと再会」<sup>22)</sup>の中で、以下のように書いている。

ここにおいて二日市保養所は医師の英雄譚の容れ物となり、手術を受けた多数の名もなき女性たちには、英雄の引き立て役をあてがわれている。お地蔵さんよりも大きな石碑がそれを象徴しているようで、ざわつくものを感じた。

元教諭も純粋な気持ちからであったのだろうが、強姦され妊娠して中絶を受けた女性への配慮、特に心の痛みや傷に対する配慮と生まれて来られなかった子どもたちへの思いが感じられない。中には、産みたいと思った女性がいたかもしれない。望まぬ妊娠であっても、自分の体内で芽生えた命に対しては、男性とは違う受け止め方をする人もいたのではなかろうか。中絶にどれだけ女性の意思が反映されたのだろうか。

#### 第4章 岐阜県旧黒川開拓団の「性の接待」

##### 第1節 なぜ「性の接待」が行われたのか

敗戦直前の1945年8月9日、ソ連軍は日ソ不可侵条約を破棄して突然満洲に侵入してき

て、満洲全土を混乱状態に陥れた。敗戦とともに暴徒と化した中国人が襲撃してきて、物品を奪っていくようになった。黒川開拓団にも危機が迫るなか、両隣の来民開拓団（熊本県）と高田開拓団（広島県）は、すでに集団自決をしていた。黒川開拓団でも、もう集団自決しかないという意見もあったが、幹部の「団長が出征していて留守の時に、集団自決すると勝手には決められない」<sup>23)</sup>という判断があつて、生きて日本に帰る道を選択する。

黒川開拓団幹部は、ソ連兵に中国人の襲撃から団を守ってもらうことと食料を分けてもらうための交渉をしたが、その代わりに「性の接待」を受け入れるという判断をしたのであつた。この未婚女性による「性の接待」を考え出したのも団幹部であつたという。女性の意思はまったく無視され、14、5名の未婚女性が団からソ連兵に差し出されており、これはソ連兵による強姦にほかならない。

「性の接待」に未婚女性を選んだ理由は、「あんたら独り者はどうかな、体を張って犠牲になってくれや。旦那が兵隊に行っている奥さんを利用するのは申し訳ないで、独身のあんたらだけ頼む」<sup>24)</sup>という団幹部からの命令だつた。出征兵士の妻への配慮がなされているが、これを猪股はホモソーシャルな絆のためだと述べている。しかし、その男の絆は、「性の接待」において、女性を「出征兵士の妻」と「未婚女性」とに分け、「出征兵士の妻」を守るために、女性の絆を分断・差別化したことで成り立っていたのである。団幹部は、女性を支配し未婚女性を犠牲にすることで、生き延びる選択をしたのである。

団の幹部は開拓団内部においても権力をもっており、危機迫る中でも団の運命は団幹部の手中にあつたのである。そのため、未婚女性たちは、幹部の命令に従うほかなかつた。ここに団幹部と未婚女性との間の関係は、「命令」と「服従」という関係が貫徹していた。それは、「大陸の花嫁」の役割のところでもみてきたように、満洲においても家父長制が取られており、女性は夫や年長の男性に従うのが日本の婦道とされてきた結果であつた。

「性の接待」については、括弧つきで示しているが、これはソ連兵による未婚女性への「強姦」にほかならないからである。逃避行中あるいは避難所で女性たちが、ソ連兵などに強姦されたのとは異質のものである。この違いについて、山本めゆは「戦時性暴力の再-政治化に向けて—『引揚女性』の性暴力被害を手がかりに」<sup>25)</sup>の中で、逃避行中や避難所での強姦を「戦利品としてのレイプ」、旧黒川開拓団の「性の接待」のような強姦を「娯楽的レイプ」と区別している。

旧黒川開拓団では、団員が生き延びるためとは言え、幹部の判断で未婚女性を差し出したのであり、ソ連兵からみれば、この接待は「娯楽的レイプ」であつた。ここにジェンダーがあるし、このことが後に被害女性たちを生涯苦しめることとなる。

「性の接待」は、団幹部による女性支配に起因するものであつて、猪俣のいうように、開拓団内においてはナショナリズムよりもジェンダーの方が優先しているが、日本の植民地支配の崩壊という結果であることを考えると、ナショナリズムとジェンダーが交差するところにこの「性の接待」の問題が起きたと考えることができる。

未婚女性たちがソ連兵の相手をした場所は、「接待所」と呼ばれ、吉林省の陶頼昭駅の近くと開拓団の中の2ヶ所にあつて、女性たちはソ連兵が撤退するまで、9ヶ月にわたって被害を受け続けた。

黒川開拓団における女性の性暴力被害は、「接待所」だけではない。松花江まで行った時、国共内戦で鉄橋が破壊されていたので、渡し舟を頼んだ時、代わりに女性を差し出せと言われて、ここでも若い女性が犠牲になっている。



## 第2節 心を閉ざして生きて来た女性たち

満洲で集団自決した開拓団の数は、わかっているだけでも48開拓団にものぼる。こうしたなかで、黒川開拓団は未婚女性の犠牲のもと、団員数650名中450名が無事に日本に帰還でき、生還率は69.2%の高さであった。

引き上げて来て故郷に帰ると、地元では満洲帰りの女はろくなことないと被害女性に対する悪い噂が流れていた。「性の接待」を行ったのは、嫁入り前の未婚女性であったから、開拓団の中ではタブーで、絶対に公言できないことであった。

ある被害女性は、身内の弟が、「好きになった娘が引揚げ途中で強姦されたと知って、『彼女のことをいっぺんに嫌いになった』<sup>26)</sup>」というのを聞いて、「女性の強姦被害に対する根深い偏見を思い知らされ<sup>27)</sup>て、胸がえぐられたという。

満洲帰りの女性に対する偏見から、故郷に居づらくなって、「ひるがの高原」に入植した男性の元に嫁いだ女性もいる。この女性は結婚する際に、満洲での「性の接待」の話も打ち明けたところ、「そりゃ、つらかったやろう<sup>28)</sup>」と夫からいたわりのことばをかけてもらったという。この夫は元青少年義勇軍の人で満洲からの引揚者である。実際の結婚に際しては、性病もきちんと治っているという医師の診断書を見せて、夫も納得の上で結婚したと言っている。それでも、夫は「妻が元開拓団員らの集まりに参加するのは嫌がった<sup>29)</sup>」という。

また、他の女性は、妹をかばって「性の接待」に他の人より多く出たという。そのため、帰国して結婚しても子どもができなかった。姉のおかげで性暴力被害を免れた妹は、自分の産んだ次男を姉の養子に出したという。

被害女性たちは、戦後ずっと口をつぐんで生きてきたが、たびたび傷つけられている。平井美帆のルポから、以下を引用させてもらう。

遺族会の集まりでは接待の話題を持ち出す者はいなかった。ところが少人数になると彼女たちはときに過去を揶揄する暴言をぶつけられた。それはこともあろうに、接待係だった団幹部からのものもあった。

(「忘れたくないあの陵辱 忘れさせない乙女たちの哀咽」『女性自身』66～67頁)

また、次のような暴言も浴びせられている。

男はああいう目をさせておいてねえ、それで助かっておいてね。帰ってきたら、「いいじゃないか、滅るものじゃないし」って、とんでもない話だよ。団幹部だった男性から発せられた満洲での犠牲を軽んじる言葉は、彼女たちを再び傷つけていた。

(「同上」67頁)

こうした数々の偏見や暴言が浴びせられるたびに、被害女性たちは傷ついた。ことに団幹部の彼女たちを貶める言葉は、なお一層彼女らを苦しめたのである。こうした悔しい、口惜しい思いを何十年も引きずって生きて来たのである。これらの偏見や暴言をはく者は、女性たちが心の奥深くにしまい込んで生きてきた苦しさや痛みを少しも理解しないものだった。このような偏見や暴言を避けるため、女性たちは口を閉ざしてきたのである。

平井美帆のルポでは、被害女性は「やがて、ガチャッと音がする…。兵士が太いベルトをはずすときの金属音だ。帰国後もその音が頭から離れず、似たような音を聞いただけで心臓の鼓動が早くなった。」<sup>30)</sup>と記しており、被害女性たちは「性の接待」が悪夢のように蘇って来て苦しめられたのであろう。

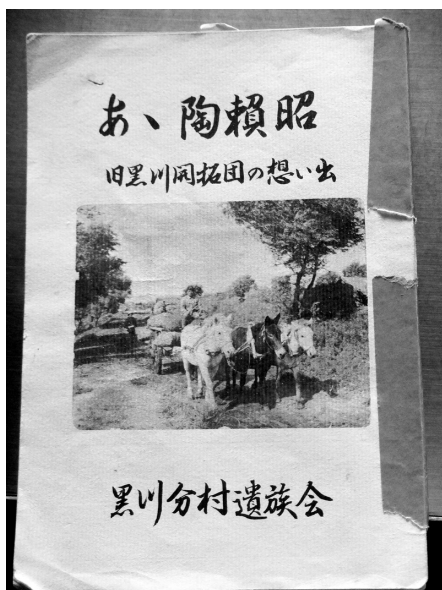
被害者たちは、忘れたくとも忘れられない記憶に、あえて蓋をして戦後を生きてきたのであった。また、ある女性は、以下のように、自分がたどった運命に苦しみ続けたという。

たった4年の満州時代は、晩年になってからも夢に現れた。鉄道の駅近くにうずくまっている自分、松花江に飛び込む自分……

(「忘れたいあの陵辱 忘れさせない乙女たちの哀咽」『女性自身』68頁)

満洲での体験が、トラウマになっていて、時折フィードバックして、被害女性を苦しめ続けたのである。このように、長く苦しみ続けた女性たちも、同じ体験をした仲間の間では、胸の奥の苦しみを思いっきり吐き出すことができたという。<sup>31)</sup>

女性だけではなく、被害女性たちとどのように接したらよいか、男性たちも長年苦しんで来たのである。元開拓団の記念誌である『あ、陶頼昭 旧黒川開拓団の思い出』には、「ソ連兵には豚の料理などで接待し、娘たちも協力してくれ誠に感謝の他はない、我々の今日あるのも彼女等のお蔭である。」<sup>32)</sup>と女性たちへの感謝のことばは書かれているが、「性の接待」のことは何もふれられていない。これを編集する段階で、資料には書かれていた「性の接待」に関する文言が省かれているのである。



旧黒川開拓団記念誌 2017.12.29 撮影



乙女の碑 2017.12.29 撮影

また、現在の白川町黒川の佐久良太神社内に祀られている「乙女の碑」は、1981年に遺族会が建てたものであるが、この碑にも「性の接待」のことは何も書かれていない。それは、被害女性に対する配慮であり、そっとしておいてあげた方がよいという判断からだった。

### 第3節 後世への遺言

戦後70年ほどの沈黙を破って、被害女性たちは、「性の接待」について公の席で証言するようになった。その背景には何があったのだろうか。

妹をかばって、「性の接待」に他の人よりたくさん出たという女性は、2016年に91歳で亡

くなったが、生前には長野県阿智村の「満蒙開拓平和記念館」で証言をしたり、地元の小集会でも証言するようになっていた。

公の場で証言するようになった理由の1つには、被害女性も80代、90代の高齢者となり自分の「死」を意識し始めたのではなかろうか。歴史の教訓として、後世のために語っておきたいと思うようになったのではなかろうか。

猪股が、「1990年代の慰安婦の社会問題化は、開拓団のために犠牲となった『乙女たち』とされた被害女性に、同じ戦時性暴力被害者として語る可能性を開いた。」<sup>33)</sup>と述べているように、従軍慰安婦問題が契機となって、社会全体の性被害者や性暴力についての理解が進み、当事者が話しやすくなってきたことが背景にあるのであろう。

2017年8月には、「告白～満蒙開拓団の女たち」(NHK 岐阜放送局制作)が、また同年12月には「記憶の澱」(山口放送制作)が放送されるなど、マスコミの前で語る被害女性も出てきた。これらの放送よりも前に調査研究していたのが、猪股祐介であるし、2016年10月には週刊誌ではあるが、現地ルポを発表していたのが平井美帆である。当然、この人たちにも被害女性は性暴力のことを話しているのである。

年老いた被害女性たちを長い呪縛から解放するには、我々は彼女らの胸の奥にある苦しさや悲しみを聞いて理解することである。被害者は、自分たちの思いを理解する者がいるというところに力を得て、癒やされ安心して話すことができ、苦しみから解放されていくのである。

被害女性の証言を聞いて、歴史的事実の1つで終わらせてしまっただけでは、開拓団の悲劇の中に埋没してしまう。この歴史的事実を特に若い世代が共有することで、戦争をしない、させない方法を考えること、性暴力のない社会はどうしたら作れるのかを考えて行くことである。被害女性たちは、きつとこのことを望んでいるのだと思う。

## おわりに

本稿では、旧満洲に渡って行った女性たちに焦点をあてて、前半は開拓民の妻となった「大陸の花嫁」および義勇軍の「寮母」となった女性たちに期待された役割について、後半では、非合法下での引揚女性たちの中絶手術、岐阜県の旧黒川開拓団における「性の接待」について、いずれも女性史またはジェンダーの視点から明らかにしてきた。2017年3月には、実際に博多港および二日市保養所跡を尋ねて、引揚記念碑や水子供養のお地蔵さんを実際に目にして写真に収めてきた。また、2017年暮れには、現在の白川町黒川地区を訪ね、乙女の碑の写真撮影と遺族会会長さん及び満洲からの引揚女性にお話を聞く機会をもつことができた。このお二人に感謝するとともに、遺族会会長さんに引き合わせてくれ、現地訪問に同行してくれた大学時代の友人の安江早苗さんにも感謝します。

なお、この旧黒川開拓団の元団員の方々も高齢となっているので、引き続き聞き取り調査を行っていきたいと思っている。また、引揚港近辺の国立大学や国立療養所でも極秘に中絶が行われていた可能性が高まったので、こちらについても引き続き調査研究していきたい。

今回は、日本の女性の被害を主に取りあげてきたが、戦時期における日本の加害性についても考えていくことが、歴史を公平・公正に見ていくことにつながることを、最後に指摘しておきたい。

## 注記

- 1) 相庭和彦 大森直樹 陳錦 中島純 宮田幸枝 渡邊洋子 『満洲「大陸花嫁」はどうつくられたか』 明石書店 1996年
- 2) 千田夏光 『皇后の股肱』 晩聲社 1977年 65頁



- 3) 上坪隆 『水子の譜ードキュメント引揚孤児と女たちー』 社会思想社 1993年 209頁
- 4) 猪俣祐介 『軍事史学』 第51巻 第2号 2015(平成27)年
- 5) 4) に同じ 103頁
- 6) 4) に同じ 103頁
- 7) 4) に同じ 103頁
- 8) 4) に同じ 104頁
- 9) 4) に同じ 107頁
- 10) 4) に同じ 107頁
- 11) 4) に同じ 109頁
- 12) 上笙一郎 『満蒙開拓青少年義勇軍』 中央公論社 1981(昭和56)年 144頁
- 13) 拓務省拓北局輔導課 『女子拓殖指導者提要』 広業館 1942(昭和17)年 124頁
- 14) 高橋健男 『新潟県満州開拓史』 2010(平成22)年 123頁
- 15) 猪股祐介 「異郷に郷土をつくる 一凌霜塾と郡上村開拓団」 郡上郷土史研究会編集発行 『史苑やまと』第8号 2010(平成22)年 39頁
- 16) 攻撃型屯墾病の代表的な事件として、義勇軍の中隊同士が武力衝突して、3名の死者と5名の負傷者を出した昌図事件がある。この事件は基本的には、先着隊と新着隊の対立が原因であるが、他にも大人たちへの不満や日本国内で聞いていたことと現地の違いなどへの不満もあったと考えられる。
- 17) 12) に同じ 95頁
- 18) 『海外引揚関係史料集成』(国内篇) 第9巻 ゆまに書房 2001年 125頁
- 19) 「引揚げ港・博多を考える集い」編集委員会 『戦後50年 引揚げを憶う(続) ～証言・二日市保養所～』 引揚げ港・博多を考える集い 23頁
- 20) 19) に同じ 25頁
- 21) 19) に同じ 25頁
- 22) 『福岡 女たちの戦後』第1号 戦後の女性記録継承プロジェクト 福岡女性史研究会 2016年 69頁
- 23) 2017年12月29日 遺族会会長の藤井宏之さんと満洲からの引揚者の安江菊美さんよりお聞きした。
- 24) 平井美帆 「忘れたいあの陵辱の日々 忘れさせない乙女たちの哀咽」 『女性自身』 2016年10月号 64～65頁
- 25) 『女性学』 Vol.22 日本女性学会 2015年 57頁
- 26) 24) に同じ 67頁
- 27) 24) に同じ 67頁
- 28) 24) に同じ 66頁
- 29) 24) に同じ 66頁
- 30) 24) に同じ 67頁
- 31) 24) に同じ 66頁
- 32) 黒川分村遺族会 『あ、陶頼昭 旧黒川開拓団の思い出』 1981(昭和56)年 57頁
- 33) 4) に同じ 110頁

#### 参考文献

1. 満洲開拓史復刊委員会企画編集 『満洲州開拓史』全国拓友協議会 1980(昭和55)年
2. 猪股祐介 「満洲移民の引揚経験一岐阜県黒川開拓団を事例に」 蘭信三編 『帝国崩

- 壊とひとの再移動 引揚げ、送還、そして残留』 勉誠出版 2011年
3. 杉山春 『満州女塾』 新潮社 1996年
  4. 武田繁太郎 『沈黙の四十年 引き上げ女性強制中絶の記録』 中央公論社 1985  
(昭和60)年
  5. 北九州市女性史編纂実行委員会著 財団法人アジア女性交流・研究フォーラム 『北九州市女性の一〇〇年史 おんなの軌跡 北九州』 ドメス出版 2005年
  6. 岐阜県女性史編集委員会 『岐阜県女性史 まん真ん中の女たち』 岐阜県 2000年
  7. 高杉志緒 「『京城日赤』と引揚医療－村石正子氏談話聞書－」 『下関短期大学紀要』 第28号 2010年
  8. 木村秀明 『ある戦後史の序章 —MR U引揚医療の記録—』 西日本図書館コンサルタント協会 1980(昭和55)年

#### 参考資料

1. NHK の ETV 特集「告白～満蒙開拓団の女たち～」(山形県内では、2017(平成29)年8月5日放送、その後、同年8月10日と10月7日にも再放送された。)
2. NNNドキュメント 「記憶の澱」(山口放送制作 山形県内では、2017年12月4日放送)
3. NNNドキュメント 「奥底の悲しみ」(山口放送制作 山形県内では、2016年2月28日放送)
4. 「ソ連兵の『性接待』 重い口開く被害者」中日新聞 2017年7月4日